

蓮の花とシオランの言葉

増田昌弘

デジタル一眼レフを購入したのだから、手当たり次第身の回りのモノを撮ってみた。いろいろ撮ってはみたが、写真だけではどうも作品として物足りない。写真自身に作品と言える力が不足している。ポスターのように何か文字を入れれば、少しピントがはずれていた、露出が不足したりしている写真でも尤もらしくなるのではないだろうかと考えた。組み合わせるコピーが欲しい、何かふさわしいキヤッチコピーになるモノはないかと本棚を探し回ったら「老いとは、要するに、生きたことに対する懲罰に他ならぬ。」というのが見つかった。シオランという人の言葉なのだが、毒があつてどきりとさせられた。

言葉の持つている意味を深く考える等というのは抜かして、単にコピーとして使つてみると、これが誠に便利な言葉で、どんな写真でもこれと組み合わせると、尤もらしく意味があるように見えてくる。この言葉をつぶやきながらフラインダーを覗くとすべてのモノが写真の対象として面白そうに思えてくる。

友人に誘われて蓮の花を撮りに行つたのだが、それが、こんなに面白いとは今まで知らなかつた。つぼみから満開となつて散るまでの

数日間、蓮は、花の生涯の過程を様々に演じ分けてくれる。蓮田では、一度に、その各過程の姿を観察することが出来る。ふくらみ始めたつぼみもある。丁度開いた時で芳香を放ち、蜂たちを集めているまや盛りの花もあれば、豪華に開ききって、花びらが一つ二つと散り始めた花もある。わずかに数枚の花びらを腰にまとって花の生涯の終わりを哀しむものもある。

大きくくわれる葉の上にぬきんでて自己を主張する花も良い。ひっそりと葉の陰に咲いている花も良い。光を跳ね返す薄紅も見事だし、光を透過する薄桃色の花びらも可憐だ。シオランの言葉をつぶやきながらシャッターを押すと、それぞれの花の生涯が、それぞれに意味をもつて迫ってくるように思えてくる。レンズを通すことによつて、目で見ているのとは、又、別な世界が現れてくるようにも思える。

画賛と言ふのがある。国語事典をみると、絵画の余白に、内容を補うように書き添える文章、詩歌と書いてある。絵と文が組み合わされることによって、それぞれの元の意味に重ねて新たな意味を生み出す。それを、蓮の花の写真とシオランの言葉でやってみようと思う。最近、安価になったA1のインクジェット印刷で印刷して、ポスター作品としてグループ展に出品してみる。終わったら自分の部屋に飾っておく。まあ、これも、デジタル時代の楽しみ方の一つ。*いへん、いへん。*



Shoan
 ショアンという人についてだが……1911年ルーマニア生まれ、1931年フランス大学を卒業して、33年パリに留学、そのまま定住してまうパリの屋根裏部屋に住んで思索を続け、何年かから日本でも翻訳が出ていて、根強いファンが居るようで、全著作が邦訳されている。バルカンのバスカル、あるいは祝祭の人と、呼ばれ、既存の思想、信仰体系への批判、神なき絶対を探索するモラリストとして、独特の思想を展開したと紹介されている。故郷のルーマニアでは禁書だそう。



私たちは、
 今日ただいままで生きてきた、
 その一切の日々を、
 もしかしたら生きずにすんだかも知れない、
 と考えると・・・
 ショアン「告白と呪詛」より



生には何の意味もないという事実は、
 生きる理由の一つになる。
 唯一の理由にだってなる。
 ショアン「告白と呪詛」より



人間という人間に、うんざりしている。
 それでも、私は笑うのが好きだ。
 そして、私は、
 ひとりでは笑うことができない。
 ショアン「告白と呪詛」より



もし、
 いつの日か、
 この私が、
 たまたま死ぬことがあるとして・・・
 ショアン「告白と呪詛」より